富岡訓子さん　追悼のことば

山家由紀

コスモスや隆夫をよろしく天の父母　　訓子

隆夫さんの一周忌に自費出版された「遺稿集」のタイトルです。

隆夫さんとは高校３年間、訓子さん・カメちゃんとは２年、３年と同じクラスでした。２年桜井ホーム、３年以倉ホーム、文系進学コースの多彩で楽しいクラスでした。Ｊリーグの川淵さん、のちに俳誌「扉」を主宰する土生さん、富岡さんは朝日新聞の記者から「ＡＥＲＡ」の初代編集長に、美術・デザインで世界に羽ばたく中辻悦ちゃん。

カメちゃんは文芸部で、機関紙「白塔」に２年生のときだったか中編小説を発表しました。タイトルも内容も覚えていませんが、彼女の処女作だったのでしょうか。隆夫さんの「三丘評論」と部室も隣どうしだったか、そのころからの縁で、いつの間にか結婚に至りました。そのときの話も聞きたかった。ふたりともいなくなって、ほんとに悲しい。

わたしは美術部で、中辻、岩瀬、播磨、江本、吉川、女性６人。美術の教室を部室にして、デッサンをしたり、ほぼおしゃべりで楽しい放課後を送っていました。３年になっても受験勉強には身が入らず、同じクラスのカメちゃんがあんまり勉強しないのをいいことに仲良く怠けていました。そして３年２学期末の三者面談で。以倉先生から「この成績でいけるところは学芸大学の聾唖科か・・・」といわれ、がー――ん。おまけにいっしょに怠けていたカメちゃんが受験を止めるということに。

それからは必死の勉強でした。実家の大きな寒い田舎家で、毛布をかぶって足温器で暖をとり早朝から夜遅くまで。なんとか第一志望に合格しましたが、その時カメちゃんに「あのときわたしが受験やめたから、あんた合格できたのよ」と恩に着せられましたが、ほんとにそのとおりだと思います。

カメちゃんは日東紡に就職されて、会社は淀屋橋でしたか、よく帰りに心斎橋、戎橋あたりで待ち合わせてミツマメなど食べた気がします。３年ほど前に、心斎橋そごう近くの画廊で悦ちゃんの個展があって網さんといっしょに行ったとき、なんばから歩きましたが、覚えのある店は一つも見当たりませんでした。

東京に来たのは彼女の方が少し先でした。６０年代後半でしょうか。当時新聞社は一般企業より給料が高くて、富岡家は小田急線・玉川学園前駅近くに一家を構えました。また隆夫さんの転勤でイギリスにも何年か住まわれました。隆夫さんの仕事も順調で、最後は取締役になられました。

隆夫さんにとってほんとに好きな仕事で成功され、カメちゃんもずっといっしょにそれを支えられて、高校の時からずっと、ほんとに満足のいい人生だったのではないでしょうか。

隆夫さんは高血圧治療の医療ミスに類するような事故で晩年は少し不自由になられましたが、多摩川沿いの明るい広々としたマンションに引っ越されて、そこで２０１４年に亡くなられました。カメちゃんは（隆夫さんのいない世界で）「生きていても仕方ないから早く死にたい」といつも言っていました。

アカシア俳句会にはカメちゃんに誘ってもらい、楽しく、また苦しく句作をしています。俳句のことについてもそれ以外のことでも、よくメールを交換しましたが、最後のメールは３月１６日夜、亡くなる２日前、あたらしくやってきた猫の句についてでした。眼がだんだん見えなくなって、選句をやめようかとも言ってました。娘さんの亜矢子さんにプリントアウト教えてもらわないと、とも。

亜矢子さんから、電話しても返事がないので来てみたら亡くなっていたと、宮本智乃さんに連絡があって、ふたりでお通夜に行きましたが、苦しみもなく隆夫さんのもとに行かれたのだと思います。「カメちゃん、思い通りになってよかったね」というほかありません。さみしいけれど

しみじみと友の初盆雲の峰　　由紀

カメちゃんが隆夫さんへの思いを込めて発行された「遺稿集」に寄せられた川淵三郎さんの「お悔やみ」にカメちゃんへもあたたかいお言葉がありました。僭越ではありますが、ここに「遺稿集」から引用してご紹介させていただきます。

富岡訓子2015『コスモスや隆夫をよろしく天の父母』183頁（非売品）

お悔やみ

隆夫君は高校時代から雑誌の編集長になることが夢でした。

それはアエラの初代編集長になることで達成出来ましたが、テスト発行の段階で毎週送られてくるアエラを見て自分も胸が高まると同時に羨ましい気持ちが起きたことを覚えています。百万部前後の記録的な発行部数だったと記憶していますが、その成功を心から嬉しく思いました。その後、Jリーグを代表して朝日スポーツ大賞を私が受賞した時、既に朝日新聞の役員になっていた隆夫君と夫婦四人揃って晴れの席で会えたことが忘れ得ぬ思い出です。マスコミとの付き合い方についてアドバイスをしてくれたことも良く覚えています。何々と言ってにっこり笑ったと書くか、何々と言ってニタリと笑ったと書かれるかで、読む側の印象がまるで違う。だから出来る限り友好関係を築くようにと。文藝春秋の同級生交歓の写真が隆夫君の文章と共に載ったこともありました。思い出は尽きません。訓子さんの気持ちの整理が付くまで相当時間が掛かるでしょうが、一日も早く立ち直れることを祈っています。それにしても訓子さん長期に亘る隆夫君の看病、本当にお疲れ様でした。最善の治療を受ける努力を惜しまず、あらゆる手だてを尽くしたことを、私が一番よく知っている積もりです。隆夫君、いい奥さんを持って本当に幸せでしたね。心からのご冥福をお祈りします。

日本サッカー協会最高顧問　首都大学東京理事長

川淵　三郎